

高齢者施設・障害者施設の 新型コロナウイルス 感染対策事例集

高齢者施設や障害者施設で勤務されている方へ



東京i CDC 専門家ボード
令和3(2021)年 10月

はじめに

高齢者や障害者は感染した際に、重症化するリスクが高い場合もあり、また、高齢者施設・障害者施設では、感染症がひとたび発生すると集団発生となる例も多いため、日頃からの感染防止のための対策や施設の体制を整備し、取り組んでいく必要があります。

一方、新型コロナウイルス感染症は、感染が広がりやすいこと、無症状の感染者からも感染が起きることから、感染予防が大変困難な感染症であり、対策をさらに難しくしています。

この事例集は、これまで複数の高齢者施設・障害者施設でクラスターが発生していることや、最近ではワクチン接種済の方が感染するブレイクスルー感染も発生していることを踏まえ、クラスターが発生した施設での状況から、正しくない感染対策や不十分な感染対策の実例を紹介し、よりよい感染対策を具体的に解説しています。

1人でも多くの高齢者施設や障害者施設の職員の皆様にこの事例集をご覧いただき、現場での感染対策の一助になることを願います。



令和3(2021)年10月
東京iCDC専門家ボード 座長
賀来 満夫

もくじ

環境整備	整理整頓をしましょう	3
	おむつカートを使用するときの注意	3
	更衣室での感染リスクを減らしましょう	4
	消毒薬はスプレー使用しません	4
医療廃棄物	感染性廃棄物はステーションに持ち込みません	5
手指衛生	手指消毒薬は必要な場所に配置します	6
	ポケット内の物に触ったら手指消毒を徹底します	7
PPE (個人防護具)	ガウンは使いまわしをしません	8
	ディスポーザブルエプロンを使用します	8
	PPEや白衣は消毒薬で消毒しません	9
	事務室などのエリアでは防護具を着用しません	9
管理体制	職員の健康観察記録は管理者が管理します	10
	飲食時の会話を制限しましょう	11
	疑似症患者の対応方法を施設内で明確にします	11
ゾーニング	ゾーニングをする際は、区別を明確にします	12
その他	歯ブラシは消毒不要、個別管理を徹底します	13

整理整頓をしましょう



× 間違った事例

職員が使用するエリアが雑然としており、環境清掃を行う際に効果的に実施できていなかった。

○ 正しい事例

物を減らして整理整頓することで環境清掃をしやすくなる。

解説

多くの職員が触れる場所を中心に整理整頓に努め、清拭の妨げにならないように工夫しましょう。

おむつカートを使用するときの注意



× 間違った事例

介護の時などにおむつカートを使用する際に、カートに物品を山積みにし、汚染された物と清潔な物とが混在していた。

○ 正しい事例

おむつカートを使用する場合は、積載する物を極力減らして、汚染された物と清潔な物とを明確に分別する。

解説

おむつカートを介して感染が広がる危険があります。使用せざるを得ない場合は物品をできるだけ少なくし、汚染物をきちんと管理するとともに、一人のケアを行う毎に手指消毒とPPE交換の必要があります。

更衣室での感染リスクを減らしましょう



✕ 間違った事例

狭い更衣室で、出勤時や退勤時に多くの職員が同時に使用して、会話をしていた。

○ 正しい事例

更衣室の使用時間をずらすなどし、同時に更衣室を使用する職員数が少なくなるようにする。更衣室には職員が会話をしないよう掲示したり、手指消毒薬の設置、出来る限り換気を行うなど感染リスクを下げる工夫を行う。

解説

更衣室は三密の状態になりやすく、職員間の感染が広がるリスクがあります。更衣室内での会話の禁止、マスク着用の徹底、滞在時間の短縮化など、三密にならないよう工夫し、手指衛生・換気など基本的な感染対策を確実に行いましょう。

消毒薬はスプレー使用しません



✕ 間違った事例

スプレーボトルに消毒薬(次亜塩素酸ナトリウムやアルコール)を入れ、噴霧して消毒している。

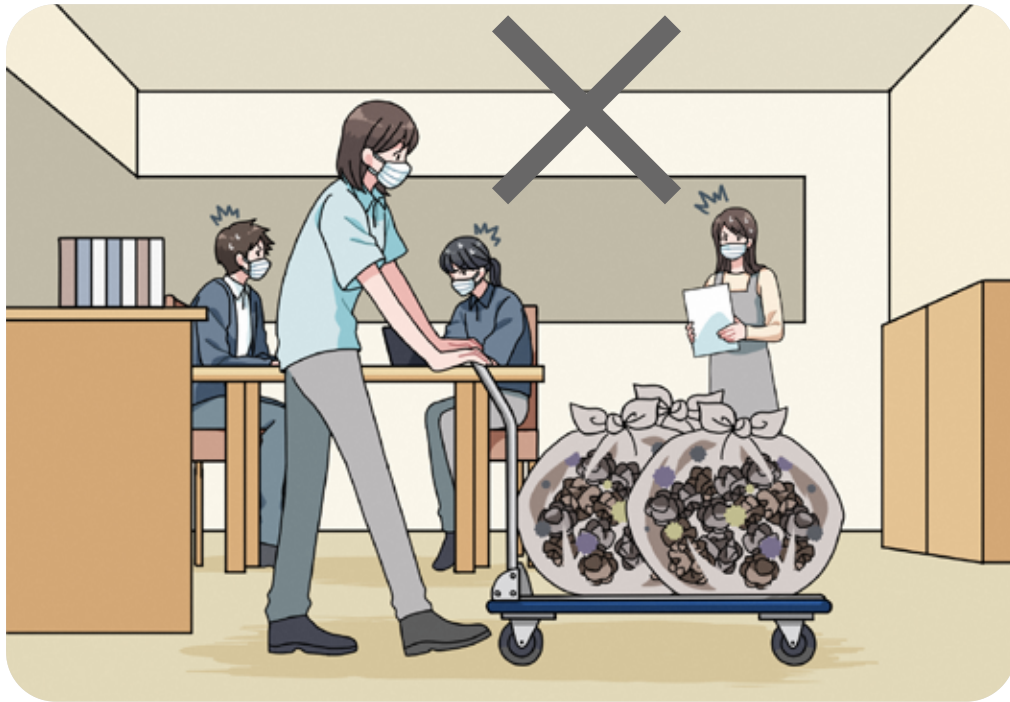
○ 正しい事例

手すりやドアノブなどの汚染箇所を消毒する時は、環境クロスを用いて清拭消毒する。

解説

消毒薬は噴霧ではなくふき取ることが重要です。環境清掃には環境クロスの使用が望ましいです。どうしてもスプレーを使用する場合は紙などに近距離で噴霧し、清拭消毒しましょう。

感染性廃棄物はステーションに持ち込みません



✕ 間違った事例

感染性廃棄物に乗っているカートがスタッフステーションに持ち込んだり、廃棄物を汚物室に持って行く際にスタッフステーション内を通過するなど、ステーション内に汚染が生じやすい行動が見られる。

○ 正しい事例

感染性廃棄物(および運搬用のカート)は、スタッフステーションを通過したり持ち込んだりしない。

解説

スタッフステーション内で汚染が生じる可能性があるため、感染性廃棄物はスタッフステーションに持ち込んではいけません。感染性廃棄物を廃棄するまでの流れを確認する必要があります。

手指消毒薬は必要な場所に配置します



✕ 間違った事例

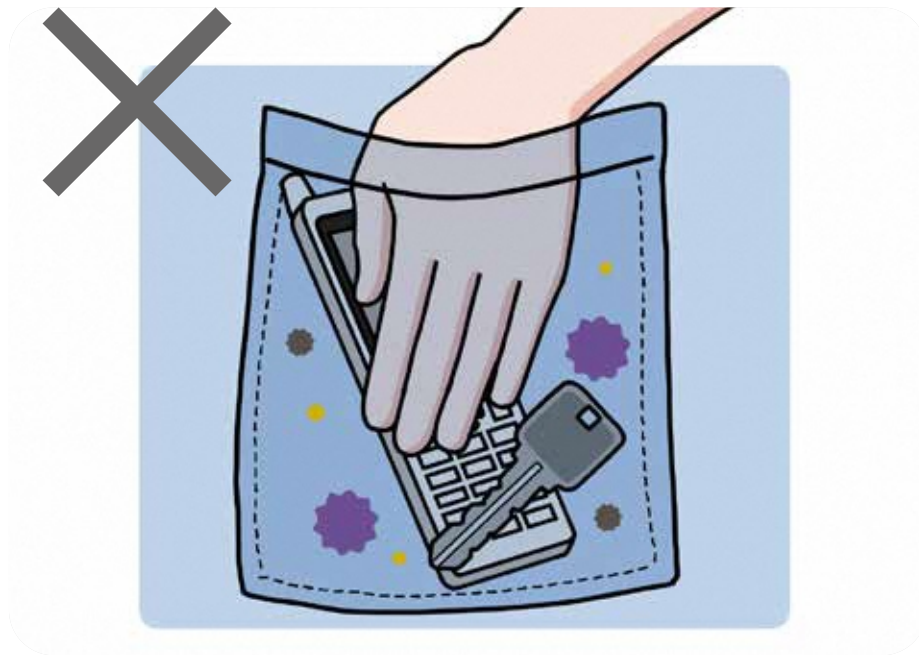
手指消毒薬が必要な場所に配置されていない。動線上に手指消毒薬が無い、もしくは少ない。

○ 正しい事例

必要な場所には消毒薬を設置する。施設入所者の誤飲のリスクにより手指消毒薬の設置が困難な場合は、職員全員が個人持ち用のものを携帯する。

解説

手指消毒は必要なタイミングで速やかに行えるようにすることが大切です。配置が必要な場所については、職員同士で話し合い、日常の業務や職員や入所者の行動などを想定して設置場所を決めましょう。ポシェットタイプの手指消毒薬がある場合でも、職員全員が常備していないことがあるので、原則として必要な場所への設置を行ってください。職員の休憩所や更衣室など見落としやすい場所もあるので、注意しましょう。



✕ 間違った事例

職員がポケットに鍵やPHSなどを入れ、取り出して使用した際に、手指消毒がなされていない。

○ 正しい事例

鍵やPHSなど共有したり汚染する可能性があるものは、ポケットに入れず所定の場所で管理する。個人持ちの場合でも汚染の可能性を考慮して、触った後の手指消毒を欠かさない。

解説

ポケットにいろいろな物を入れて勤務中に取り出して使用することで、ポケットの汚染も起こりますので、必要のない物は極力ポケットに入れないようにしましょう。もし仕事上、持ち運ばないと不便な物がある場合は、消毒用のクロスなどで拭き取ってから使用します。ポケットから取り出した物がすでに汚染されている可能性もありますので、使用後は手指消毒を徹底しましょう。

ガウンは使いまわしをしません



✕ 間違った事例

濃厚接触者に対して、職員はガウンを着用して対応していた。しかし、同じガウンを何度も使いまわしていた。

○ 正しい事例

一度着用したガウンは再利用せず、入所者ごとに使い捨てで対応する。

解説

PPE(個人防護具)の再利用は、汚染されたPPEが次に使う入所者に触れることにより、感染が広がる危険性が高いです。PPEの残数や入荷予定数を確認し在庫状況を常に明らかにして、必要なPPEを計画的に手配しましょう。脱衣後は、足踏み式のふた付きごみ箱に廃棄しましょう。

ディスポーザブルエプロンを使用します



✕ 間違った事例

おむつ交換を布製のエプロンやガウンで対応している。

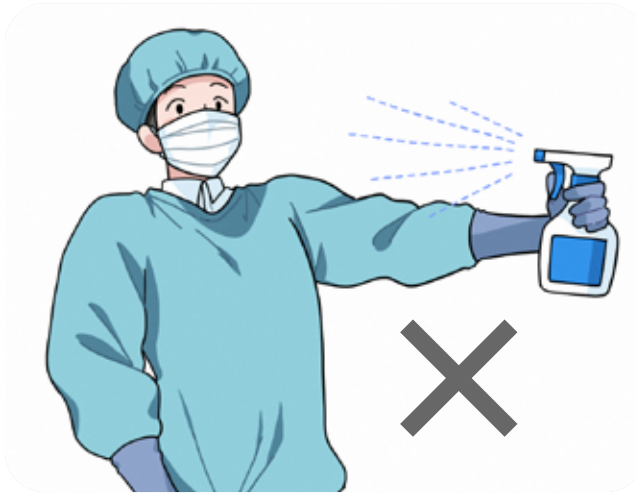
○ 正しい事例

おむつ交換では撥水性のあるディスポーザブルエプロンを着用する。

解説

身体的な接触がある場合には、撥水性のあるディスポーザブルエプロンと手袋を着用します。1入所者と接触するごとにエプロン、手袋を交換し、手指衛生を行うようにしましょう。

PPEや白衣は消毒薬で消毒しません



✕ 間違った事例

PPEや白衣に、消毒薬を噴霧して消毒し、使い回している。

○ 正しい事例

PPEや白衣は消毒薬で消毒するのではなく、その都度交換する。

解説

PPEや白衣などの消毒薬の噴霧は、感染対策上の有効性はありません。消毒薬を吸入することによる健康被害の可能性もあります。使用したPPE・手袋や汚染した白衣は、その都度交換するようにします。

事務室などのエリアでは防護具を着用しません



✕ 間違った事例

事務室などのエリアで常時、手袋やエプロンを着用したまま作業している。

○ 正しい事例

事務室などのエリアでは、医療用マスク以外の個人防護具を着用しない。

解説

個人防護具は一行為ごとの交換を行います。二重に着用しても外す場合に内側が汚染される可能性があります。事務室などのエリアでは、環境の汚染による間接的な接触感染のリスクのため、医療用マスクのみ着用し、手指衛生を励行しましょう。



✕ 間違った事例

職員の健康観察記録を自己記載のみとしていた。また、出勤日の状況のみを記載し、休みの日の健康観察を行っていなかった。

○ 正しい事例

職員の健康観察結果をチェックする担当者(部署や施設の管理者が望ましい)を決め、対応を要する状況かどうかを速やかに判断するようにする。

また、休みの日を含めて健康観察の対象とし記録を残す。
さらに、勤務前、勤務中、休日ともに、体調不良を感じたなら、すぐに担当者に報告するように啓発する必要がある。

解説

健康観察を徹底させるには、個人に任せるのではなく、管理者が明確に管理する仕組みを作り徹底させることが重要です。

飲食時の会話を制限しましょう



解説

マスクをせずに近距離で会話することは、感染リスクを拡大する行為です。食事は会話せずに済ませ、マスク着用後に会話するようにします。特に終業時は気が緩みやすく滞留しがちですので、できるだけすみやかに帰宅するよう啓発しましょう。

× 間違った事例

終業後に休憩室内などで、複数の職員が飲食をしながら長時間会話をしている。

○ 正しい事例

休憩室内に関わらず、飲食時は会話を禁止するようポスターを掲示するなど、注意喚起をすることが重要。

疑似症患者の対応方法を施設内で明確にします



解説

感染疑い入所者が発生した場合の対応やそのフローチャートを作成する場合、公的機関のガイドラインを参考にしたり、必要に応じて専門家の支援を受けることなどが理想的です。どの職員も同じように対応できるようにする必要があります。入所者だけでなく、感染が疑わしい職員が発生した場合についても同様です。

× 間違った事例

入所者で発熱や呼吸器症状など、新型コロナ感染を疑う症状が出た際の対応方法が明確になっていない。

○ 正しい事例

新型コロナ感染を疑う入所者が出た際にどのように対応するのかを明文化し、誰でも同じような対応ができるようフローチャートを作成する。

ゾーニングをする際は、区別を明確にします



✕ 間違った事例

ゾーニングの際に、フロア全部をレッドゾーンとし、ステーションでもPPEを着用している。またPPEを着用している職員と着用していない職員が交差している。

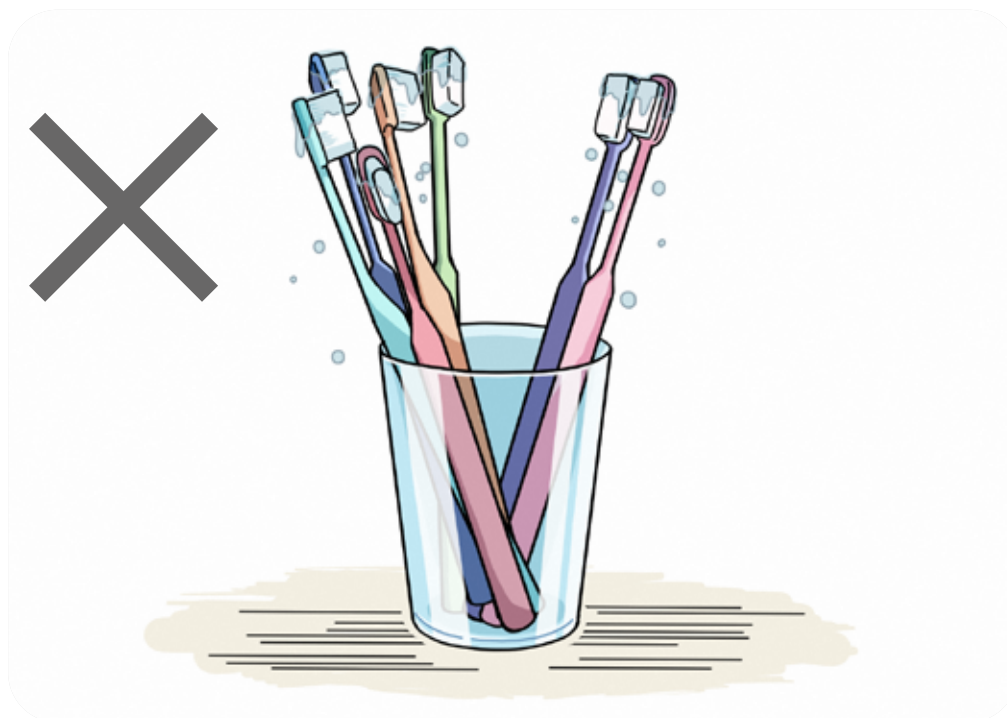
○ 正しい事例

ゾーニングはレッドゾーンとグリーンゾーンを明確に区別し、交差しないようにすることが必要。

解説

レッドゾーンはなるべく狭く設定した方がよいです。入所者が立ち入らないスタッフルームなどは清潔区域とします。レッドゾーンを狭くすることで、スタッフの(リスクを伴うケアに対する)意識の切り替えがしやすくなり、PPE着脱手順を含む業務もはっきりします。そのことが職員の業務負担軽減につながり、職員の安全を保つことにもなります。

歯ブラシは消毒不要、個別管理を徹底します



✕ 間違った事例

入所者の歯ブラシをまとめて、家庭用塩素系漂白剤や除菌水で洗浄し、まとめて保管している。

○ 正しい事例

歯ブラシは、消毒せずに互いに接触しないように個別に管理する。

解説

歯ブラシは消毒する必要はありません。体液による交差感染が起こる可能性があるため、やむを得ず集合して管理する場合、歯ブラシ同士が触れないよう十分に距離をとりましょう。

高齢者施設・障害者施設の新型コロナウイルス感染対策事例集


令和3年10月 発行

登録番号(3)195

編集・発行 東京都福祉保健局感染症対策部計画課

東京都新宿区西新宿二丁目8番1号

電話 03(5321)1111(都庁代表)



令和3(2021)年10月

監修:賀来 満夫(東京iCDC専門家ボード座長)

作成:東京iCDC専門家ボード感染制御チーム(五十音順)

金光 敬二(福島県立医科大学付属病院 感染制御部)

具 芳明(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 統合臨床感染症学)

國島 広之(聖マリアンナ医科大学感染症学講座)

菅原 えりさ(東京医療保健大学大学院医療保健学研究科 感染制御学)

松本 哲哉(国際医療福祉大学医学部感染症学講座)

光武 耕太郎(埼玉医大国際医療センター感染症科・感染制御科)

